

掌中其角護句集
編三

全

70

1

2

3

4

5

6

7

8

9

80

1

2

掌中其角叢句集

春之部

霍さも何も顔 潤けきくふく結去
松のさす伊勢の家の人を誰
え日の崖責十乃指と後し
く戸弓や出由時取裏四天王

手ニ握蒙ヲ口ニ含難ト舌ヲ

おのりあやうふくもて葉はしめ
あ水よ松魚のを空る涼くさま
室引よ地牛の角をたたくちり

大根画燗

兵忠むくしてあうり子日ろ那
帯をぬそ神代あうり踏歌宴

十一日

おけ子と還城楽のためせうま

ちりあやうふくもて葉はしめ
あ水よ松魚のを空る涼くさま
室引よ地牛の角をたたくちり
大根画燗
兵忠むくしてあうり子日ろ那
帯をぬそ神代あうり踏歌宴
十一日
おけ子と還城楽のためせうま
ちりあやうふくもて葉はしめ
あ水よ松魚のを空る涼くさま
室引よ地牛の角をたたくちり
大根画燗
兵忠むくしてあうり子日ろ那
帯をぬそ神代あうり踏歌宴
十一日
おけ子と還城楽のためせうま

和心水推敲之句

たゞく時とき月よりより安の門
統押のまねあり形くは梅枝をれ

宰府奉納

守梅の阿とひつりり野老賣
元日嘉珠喰わじし人の句を祝と云ふ
夜光るる光結つるまや貝乃玉
小袖急ぎとく伏丹入梅の枝戸

茶田よとるもる画一

常やこりぬぬ朝日山
うら飛すや巻海なる孔可一
常や長刀のゝみなる一

山更上京

貫はくもわらひも軽き柳が
破珠の質なるはあゝの柳楽那
と紫虫を畧

燒紅く紅琴うらうらみの柳うね

芭蕉の自画十三懷周之續

師の坊主十年志えく柳蔭

白魚や海苔ハト魚の買阿はせ

赤りまこく水の名はす免まこも

ふと川清き流やむき規

四睡圖

かきろふは寐ても物くや虎の耳

鼻のあはぬ目鏡やおやろ月

ねむ物と雲松花のまふ月夜が

遠遊醉歸の歌のうらやま

まゑ赤上の女とらゑむまあり船

やふゆりやを色ゆりろらたつらば

屋ふ入や生合点くしてたふ戸を

人の胡椒の粉とりのおくれを

耳ぬつらくさ免もわに鳴きうね

自得

鳩を嚙く子猫紙舐ふこぼれ

吉原の初午

そろうまや賽銭とくま芝居わ

初午よちの向りの俗をふり

此子違ふ祝歌い

いの字をりおるひそめてやいあり山

まじし舟或士ハそくのも彼岸か

ちの草の盆と見くらり飛老賣

う免うや池一とち紙あふり

泥亀の腕とおもんもおま

見獅子伶有感

てふとるや獅子舞獸名君と

百とせハねるう茶能あてふれ

画贊

燕やの後交巢紙曳いり能あり

かしあさし樹のさうよぬま燹

川燹 縑さぬ野と見ゆる

帰る雁来つさるも古ゆやあふ

小田之寸鯨もさうも也 残る存

市川女中 退善一子九翁名

つさゆるよ

塗敷 虎父ハさうも也 雉子のさう

世の中 舞何りはのし 文のさ

何きかのやこさ 桃花の雛のさ

毛丁ろ雲よ 腹まさ 糸と雪キヨメり

割て入るるも 花冠も 箕手のな

あつたの神さ 山のまを 救の雛

ゆこのしやひ 那の 射志く 小蓋

三月四日 雪ありき

雛也 其れ 佐野のさうも 雲の 雛

さうも 雲の 雛

昔よりなまよふ家酒かろん娘うひる
雛やそも甚盤よたにしまろろひ
折菓子や井筒よるりそ雛のたを
紀國の鯛釣つれそあはひのね
財つるや白洲か末結まらね松
庵ちろやあつき上しん水の粟
貝母と貝をむきゆり
あま貝むろのねうそひぬ

仁和寺

いふつきの花とり木まじし櫻うた
ハツるる春山のはらうや一況と

雨後

さうらちる跡生又目を忘れはし
はらう狩りから目黒のあつとを

芳野山あま

あま早やさうらけとあめ山うら

口ひらけ魚下し汲るる水も
一食千金とてや

汗のあめ何五支さ着けらるる綱
交猿のともさきくひそな花衣
縁くくあまのねりや花結を
泥坊の花結うけよあまねたり
花ひく川なりとりお乳のき出さ
地うらやまのけりま松をとり

複鳥

花風や天女負まゝく歩まゝり
且夕のけりみちひ家つゝし
茶舟の里ハ茶搦者水きり
ふ友と酔みそよつゝふ西下り那

画賛

友結茶ふまゝく歌い壺あり
ふち笑く松魚ふ日せかき危

うらうらこかえり鳴江の早夏の敷
ちんちん引蝦子そら赤たもこい
あつ人の子のなとこひき
こらりやあひひ子たう蜂之助
休小塔の巢かき一強よ
ちんちんけのさくら三八宿とこそ

三月尽

若くは春に送れり白き如

夏之部

寄甘己

白禿もたうゆるそらりそと夜このえ
乞食も天地とあつる夏ころも
沙草も樹下

虫つらぬ銀杏あつるお子親
あつあつとあつるお母や時多
目の上り目とかく人やあつる

夢昼

初目よ森足成りへ蜀魂

姉の傍の野丈太孝ふときこ

めされく縁とぬりこふよう

起りきけあの時を市多蒸記

留市之恋

ちりくと物と信くまや郭公

我白人志くは身と鳴まの六橋

証らんく驚破時多るあ結戸小

佛之この世名ハ多しは可あてや

らふら生れ出せん

麦飯や母りたるせまく佛生と云

うの晁や妨く山のみら姑く後

年寄り一 義紫のやうの物わしけ

舟よあの均しを吹や夕暮紫

河州観心寺

桶の燈ぬりよーーはたんう那

うかれ女や異見ふ咽む夕牡丹

むらさめや磯山を名ぬー海見ま

紅毛来負の品奇船りよー

桐の葉新渡鶴鶴 毛のいそは

と白くかゝる海より夜の青すゑ

夕志不やあゝのるふりふりあら

ことろきみの名と昔よてうやえう南

筑前紅と

あゝぬ火の鏡ようつる牡丹う那

魚市涼宵

扱多妃の夜と活と家松魚外

袖裏や茹くけりけり白く李

簾まけあゝ腕まゑのまつと

水漬よりうこほまや牡丹あ

奉納

うゝ衣は秋やかきくこまのたこ
菘さうく風もたのすくしぢりの花
箏や丈山あとかん繪の錆
似城のるちなけしやうりお若

岩翁亭歌送蟹

こゝろこも懐へさうふ解ちの足
味さうぬ志りりも悟し鳥麦
馬士起りまはらうぬるま所外

蟹のま萍尔年とひあかとかや
摺碎虫の苗穂よ出る秋の歌あ
疱瘡の何とまけるうり能ありは
残湯を沿りかりし家あやあ
幸つしあふ庵と志めて昔あ那
存根まきこなうんそ背る昌か
三弦や寐衣了らるむあ肉あ
さうこれやまも外城通る人

燕もあつく色那くさつきぬ

いの島

微雨の窟を既一曲穿へたまへ
何故きりすらんさうき又月圓
舞坂や雪姑め月結免うさる
あやもや竹も酔日思ふ人何川先
巖有隙為の大流もせぬきき
み月あのももやすむう流のた

自愧

秋あつて母森きりる水難
ふ物籠うやよ清申くさる
永代島の茶店よあつりして
めろさう神崎をれさ鮎の蓋
目ありの周を獲や築さるひ
鎌倉やびろし鹿角能蝸牛
文七よぬまのふまをのうさつり

糸の戸よ家と蓼くふ螢うれ

的形

此碑こハ江沢哀まぬ螢このま
故けしらす夢の浮橋のまあり
表くぞ霧ん残帳又風と入る者

夜讀書

故とら山や枕みしる本紙辨
故燈火く又夕自志ろし 橙 ち

おとへはせきくしてる日母も

蠅退ふ年、妹とまれめや瓜作り
不二の電蠅ハ湯屋よのこりりり
入湯の人本が又蚊のこりし示

蜂の義うましらもつるま控う那
とま形くや木のゆりまらる園う船
糸の螢さうらふ志ある時もりり
反木まけ流よの破風 五寸

或人の従者多量の錢とく

ちう結衣と吉次う冠者よ娘か
夏の夜ハ森ぬり痴氣のおとろ危
夏月坂坂寂寂し〜とあ百支
あ〜雪ふもあさ〜お流やふ〜傷
と寝〜ん又〜る〜る〜る 不二日記
引舟の襪
夏よよ〜勝〜か〜と〜と〜る〜り

画と影す

夕月や一白のこまあ 若草の宿
藻の花や海老哉き袖よさ〜れ不
瓜の花
この若ま獲あやま何〜瓜持糸
あ〜〜し 結塩茶乃〜り瓜の後
何〜る〜 鏡よ〜る〜り 六皮半
母の日や又泣出はま桑〜り

ぬる味喰ふやせしと強らん瓜蒞子
明乳乃と信木のわらやを結えん
血絆千約老濃あもや心志
ふよるも林檎ハ神ておりし
百日のあらし患しや何しハ纏
百姓乃と信るあらしや一抜河
止波浦しき

魂引すと延喜のまふく善代汝

瓜の皮水もらあて年流まらり
浴衣着く瓜買年申袖もくれ
出羽のゆりとりみ月子

常木よ蒺子とらぬる夕色う那
ふありせし時乃すくく出羽子
於人や木よあまかあきく玉羽子
法のさえびれき壺の窟か那
歌仙貫之の古昼よ

冠りも指成さふ免り哥の汗
汗濃さよ衣結宵纏ゆら形り

市中白雨とつふ題よ

鳶此鳥も夕暮のうらさし
夕たちめり成さしむと嵐の子
白雨りし即ちり卯え新女ふま
ゆらさちや洗ひかふる出ぬる色
白雨りし独活のぬふひろき白か

世平ありきておりの秋ありしき候

玉よりすむ友よ臆乃糶雪清水
松系平田今すはりや昼休を
甚の紫の赤罽をかき暑あれ
むらめ乃木絨平こゆるあつさか
紅平らちハのあは乃白ひうな

布袋の襖

痛くうちと子とも起まな夕納涼

花う家う星う川急う路まうんぶ
すうはや先むはう種乃流星

牛御前

是やまぬ雨と夢ん下まこ

蟹とゆくとたす人

うまふのまうま中へ蟹路甲

大雨大風

吹降る合羽子持よく後う

秋之部

格枝亭柱のくく

乾兌坎震離艮坤巽

色也殊多ゆりを撃す山おはしと
下字自然りまらるるを跡之五所也

殊夜話隠林

雨冷千羽織や秋路叢草う
星合や人路う物乃瓜を

笹の葉を片枕つ帯くやわく遠へ
二星うきを隣にむすめ年十五
素堂母七十七歳の愛歌煉七草
星の歌よ花火紐とく後をよ戸
妻星よあふり一とせ何れ女り

餞肅山子

あぢく待伊与簾もかほし桐の妹
春日野や風あく猿杵一柴川

暮辞といふ歌也

あさうぬふさかきやしくの夕う那
そこらに妻あわれま娘む榎垣
美女美男灯籠よとくは迷ひび
又月やうきと刺鎗城獵領く世の
人強いとひまよとよと

眞切忠かくととて魚乃り大赦を
陀羅尼品

銀城飛龍もろりや墓まゐり
小娘の生さぬまろしかど踊
一長屋寝せおろしやまろり
投られて坊主もろり角力
うさ衣結こ平いせしやお撲もろ
一両う花火まもなきひろり
扇酌茶火もろくろる鷹後ろ
いねつるやまのふるむろろハ西

青園やまろ乃むく小鳥海
笠取よ富士の雲が志ろれ笠
ねろろハ雛ね肉後そろろ麻
二間茶屋ろろ

白馬の尾髪吹とみすろれ
召あろろろろ子方や花すろ
在原寺ろろ

猪ウキ乃志ろろろむろろ

遍昭の讚

傳西よ鞍うかしのこ女所死
 うれしと見猿のと見のちん由酒
 茶釜ゆきと人の掃除や白芙蓉
 ありとて於芭蕉よのくそとときらり
 湯油らむゆ屋の罽や藪のそり
 たをこては山田結時の日夕うけ
 後とけりし骸骨ととふ萩のけり

彦根と流るる皆や水戸ん孫
 頼指やありとぬ入りむしや戸と
 元結のねるまをのけりし雲の夢
 葉栗と伊勢城のこころを
 板もゆかり茶屋のそり結る息
 松むし小狐とふんまをそなもはし
 酒買り申うる為萩の雁孤ッ
 一と母の妻もあまう菴天川宿

山の端をやんまうへはや破き登

冠里をぬきとてし 松をりて

初鴈や其六切をぬき百豆持

品川も連よめつし 雁のてゑ

鴨とちりくさふし ちまのの鴨とて

心まふ食ぢぢる

鴨とて赤子也 頬が吸てよ

みるく乃既中を人よぬはせり

山麓の戸ふも念ふと ちりく相

春澄よとく 稻原鳥とくるあり

木辻より

門たちの袂をくち 男麻う那

小系女や 紅糸とくぬき海尻

さちを糸 毎夜をす 鱈の那

小いりや 一口 茄子 ちま門

ほのくと 胡鉈 ちま 根釣う

高雄母

秋暮夕覚我せころせりし
るん山の不二よ曇ふやあまの巻
木免悲ひとり笑ひや秋のらま
あまのくれ程又のふりるをたそそ
青海や浅黄なりあつてあきか昏

野田玉川は西行上人孤塚井のほと

澄り井をたふよなごりせ秋の阿免

雪の下あり

たぬさうの宿の庵子や茶の強仕
翼好まぬやうのらん唐も
釣曳や岩さそまそくめや苔根
維摩の漬

山能えハ大衆なうり床乃月

張良図

宵中の兵りごと 子ら月

布袋此月と掬は弦と

有くちりさ水の月とや爪はしを

閑倚携

猿這ひよ影うんとも橋おつ死

寺此月葡萄膾ハ影あよりん

小野川檢校の餞

入月や琵琶と備尔をさ免らん

夢かまじく猿の齒ふし峯此月

納屋よ何雨吹まれてけり此つま

沙書あまの弦よ

杉の事あまきりしを此月見んか

得蟹無酒

蟻蚩画くを此後遠きる月見んか

人言や月見くゆをあしとま

上交語上

平家おを太平記の八月も見んか

娘あを丸まきくらや 月見くれ

僧と吐あつゝ

小便早起く月夜 見えりり

名月や夢のうへよま川流るる

名うやあむ佐吉の法く田志戸

三日糧とつむいりあま

めぬまのや十歩よ勢を握りり

名月やうるるまき川 袖儿帳

新月やりのをむ河しのをまき山

闰十五夜 赤の十五夜に戸あかりルル

は番屋ハ照月と月んく 強河舞

君ういひおんと云まきく出らるあつと

おあのと青豆うりり神のつき

いさとこひや竜眼肉のあつと強も

十六宿ハ儒者と名をあし 姿あり

あまのの上結後茶子お太郎よ

三栗乃うらなうらちを角被
生栗を握つたうら山路う草

駿府は番子旅立ちる人糸

たうらへ糸織こらも木洗桶

津所柿やうら園よきあけこの裏

同来う推しお里お松おふより

月日お栗崩葡萄うらうの甘露有

あまの實とつたえとや雁おお

いつしうらうらと干は形や大井川

稲塚お戸塚おつくと田守お那

おとまの卵うらまきくに落穂うら

種茄子北斗とねらふひよりお

茶のうらきおむしおや新豆腐

うのうらちの撃こおれておけお

雨をう埃お這ふ葉を先おん

うら油よあのおうらの袋きく

昼菊

行くかく蒼ハ後月 かく獲るるを

素堂残菊の會よ

秋さくよ十日の酒の亭主あり

菜苑

菜をきる河とまろくも形ありを

三鳥子く重陽

門酒やるを秋さく乃菜苑と

子く秋さく歌人秋名字をのま

袖の浦といふ貝つく

白菊秋貝秋実不きん袖乃ら

笠さくく西行の図示

菊とさくてまろくちさぬく芳くや

未曉登

後つきよ秋子にさくく月る菜ハ

筆多のゆ秋まらうわし田その菊

子安の強人百菊の練情

柔うやまきく糸詩人の質カタキせう家
柚の危や起のりく糸柔乃露
きく糸酒蒲萄のうくよ志くきりり

内菟風虎公十三回忌

柔の香おたの所をまんぬ履さし

菊花餞別

友成冬菊糸使千播戸まき

茶研てを粉狀あるすう及糸月
後糸月上の太子糸雨夜う那
漬蓼の種又出る月糸糸糸
道後河紅糸糸をくちなりことこの山
ゆきちしと朝熊の柵といえれり
う枯やるも籠らふう川のやま
言世ゆかききりり
頼政糸月見とく糸や九月尽

冬之部

高野みく

卵塔虫多居やぢみも神坐月
志らうや葱臺 虫 一のこ 柳

釣梯虫夕日尔うらぬ北志くま

芭蕉翁病床

吹井とらも鶴城まひうん時雨か
飼猿の引窓はくふ志られのれ

松原のすま戸をんきる志られうな

多世以翁終焉の記

なきかゝと笠尔うらまや枯尾死

同年忌よ三カ

志らうやらうも海路と墓まみり

七とせと志らうにやぢらうお折しんれ

辰霧や風尾の卯虫それよるも

意平志や自刺しきくろ水あくそ

風牙氷不穿一死也狐虎尾
木枯也形多枯小橋虫聲も満
冬木まゝいり冬もやゆのたゞままい

坊主小ま湯小ま糸坊主と帰死

坊主小ま湯小ま糸坊主と帰死
切やその戸死にさす線蘿蔔
煙火死動死きけを死りくす
うつら火牙芽やく人を薫す

松のさや炉の富士と焼西庭形
侘の強く一輪の散茶兼味ゆり
さる一まひりり兼住海以ろり那
片手赤落した火神と幸死物ととて
忠度と灰角や吹く火神の那
名も忠度といつるしらねと對し

炭と里と鏡の如帯し手橋
まま焼死ひりりそあらん谷死きハ

新宅

作の場乃小庵船へ一岸依
 さらもるうかの一草さらあまき見
 表名ひす十九日ありんぬぬり
 大黒のうせうにありて
 酔さるるく大黒のせん又あひす
 舟板小判たきりて夷講
 差我山や郊をさけのえひす後

何よりん藻魚たうとふ冬さうま
 深さや二冬あられく柔かひ夜
 帆か多船のまや堅田の冬りしき
 祐本戸や纒のさくれく冬結月

佐吉あき

草葱結葉をひとり流まあ冬の流
 増まればわううあ人冬結蠅
 絨子着てりうふ船もわり大井川

目さうりせききる那中の浮世久れ
おき出く事忘らふ身や足袋殿中

大町新巻

水仙や宛はゆくの小嶋臺
團らうり大工めしきりむろの毒
朝鮮志妻やひくらそ葉人冬
水及垢ふる体めりり大根引
延虫の川燕どうしやみるあき

秘蔵のふ船かからさや筑戸汁

まき水三十五日

ふりか式はまらぬ種紙納豆汁
整美の衣木織志一夜拵りり
滋樂味の大洞ふあそえおのあう
流へ降阿しきこやちりり波の着

市川三升と祝す

三川ますやあをそ水うぬあゝの筋

滝幅や氷の中ふみさき松
たつやりの城のさかたや 吉野山
使者ひくりに去院へ通ふさふさや

父の医師あはれを戯よ

純汁よまきこ本草のさかたしあれ
河豚あふ水かきりや下河原
人妻の大根さう紫花あくと汁
生煮をせふくこひふたり物くと汁

妹る子ハ胤かみ是う小叔あとり
氷りも蓋とくちよ 船の沖
砂をきや火のつゝ出良杉かみ垣
砂をきり人ものほるゝ依えんあ子
めつゝしん毛のり降きす垣のあな

寒山の賛

寒の恩よ門の 雪をさうくを食うを
あかきとあがり人を糶し 雪のうら

馬より岩さうそハあゝ世の門
を以て世をうまひ世紙をまき世の
芭蕉を庵とさひし

表老ハ簾も何事にも庵 砂を

山居の傍

茶を飲めば猿の茶を煮りり太山寺
をうちや 庵りまどろく山忌衣
戸障子の音を 暮るり杉の音

望聖殿山

為由成や大能字枯茶 山の景
かえりて也糸田ハ庵を 暮るり
すてりて ちのふ糸を白糸 暮るり
おのハあやゆき ちのふ糸を白糸 暮るり
腸が境入とさけあや ちのふ糸を白糸 暮るり
温純色へゆく念佛をり 夜の音
黒塚 又黒谷 暮るり ちのふ糸を白糸 暮るり

わろく茶の待さこそ盧全もそもの目
あつたれ親も格氣も師老も
子ももつたが茂川あてて 辞 教
こまくくく舞笑ハ中じもちたき

柳屋の酔房

恋の意 差紙 筆をこころへ

詩商人 年次 貪ふ酒債うね

いささかん 逢ふ酒屋の上たきり

江戸本石町十軒店 萬笈堂英平吉藏

其角發句集 二冊 嵐雪句集 二冊

蓼太句集 六冊

俳諧文集 二冊 蟹守大人輯 尚時言名の俳人の文珍輯

發句古今撰 同輯 附葛里連句集 三冊

俳諧新五百題 二冊 護物大人輯

新五百題 後編

同輯

二冊

發句類聚

蓼松大人重校

二冊

發句類題

雪中菴火人輯

二冊

發句五百題

白雄房撰

二冊

俳諧恋のまゝとらま

律雪庵北元大人輯

二冊

このまゝも是迄恋まのまゝ恋の初あまふよりして
恋の初まより集む

俳諧手焼灯

季考の書と

二冊

袖のくさ

季考懐中小本

一冊

俳諧四季名奇

懐中本落家撰
季考大成より

一冊

俳諧季考便覧

懐中一牧搦

萬葉用字格

春中上人撰
万葉集の初あまふ

一冊

定家卿の歌巻

一冊

今古の形を 喜井八穂大人撰折本 一冊

尚古の那を 山本明徳大人撰折本 一冊

対照の形を 若波の大人撰折本 一冊

音便撮要 喜望上人撰 懐中本 一冊

子島の跡 中臣親満大人撰 一冊

あのとと色紙矩尺の書ととがも隠然然
ちちのた人の書ととらうらうら

